

ポイント

気候変動・少子高齢化で生活レベルが低下。それぞれの地域でローカルに凝集すべき。都市を相互補完する交通インフラを重視

林 良嗣 名古屋大学教授

21世紀の日本の、20世紀との決定的な違いは、気候変動と少子高齢化の複合による生活レベル(クオリティ・オブ・ライフ)の低下(低下)と人口の増大にある(図参照)。気候変動によって洪水リスクが増加するとともに、熱波の頻発などによって暮らしのクオリティ(快適性)が低下する可能性がある。同時に、少子高齢化がもたらす人口減少の圧力があつた上、都市に滞在成長力を低下させ、これに都市の郊外スプロール(無秩序な拡散)化が加わって、コミュニティの人

経済教室

の関係が薄れ、社会が脆弱化している。また、自然の猛威が襲いかかるという図式が現実味を帯びてきた。

コンパクトシティを考える① 農村・小都市にも適用を

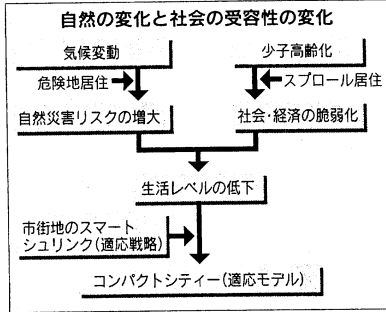


を真に実現するには、ただ縮むだけでは十分ではない。凝集して「強く美しく」なることが必要である。この適応戦略を「スマートシユリンク」と呼ぶことにする。すなわち、

戦略的「凝集」が重要 環境・費用効率を意識せよ

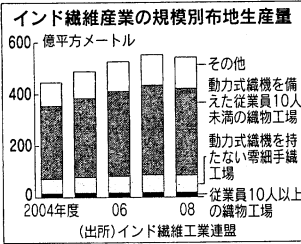
市街地を集める方が、経済効率は上昇するかもしれない。しかし、その代償として、日本という国はモータリソンの救済といた面になるであろう。これでは本末転倒である。凝集することで生活レベルの維持向上を目指すとする原則を忘れてはならない。

れべらいつ充実した生活を送っているかを示すQOLという概念である。それは5つの要素から構成されると、私は考えている。 第1は雇用・所得などの経済機会。2つ目は、文化や芸術享受したり、教育を受けたりする「生活文化機会」である。第3に、住宅の質や自然などの「快適性」、4つ目は、安心・安全。豪雨があるところや水不足のような地域では、QOLは低下する。5つ目は、環境負荷を抑える「環境持続性」であり、これも人々の満足感を大きく左右する。 都市や農村集落をスマートシユリンクさせる取り組みには、都市の機能と規模の関係を幾何学的に分析したドイツの「中心地理論」的な国土づくりが参考になる。ドイツの様々な規模の都市群は、大都市を頂点とし、末端は人口数千人の集落に至るまで、階層を構成しながら、一つの地域を形成している。その中で、ある都市が単独でサービスを提供できない場合でも、例えば、A町には病院、B町には美術館、C町は劇場があり、それらの間を便利な交通サービスが結び、都市同士の補完関係ができていく。成熟した時代を生きる将来世代の成熟経済下での地域経営の知恵である。 都市同士を結びが「通路インフラ」である。ドイツ語で「バーン」(Bahn)と呼ばれる。バーンにはアウトバーン(高速道路)もあれば、アイゼンバーン(鉄道)もある。 ドイツでは、交通網整備に対するコンセンサスが完成している。すなわち、



現在の日本の中心市街地には、さまざまな集結場所がそろっていても足りない。コンパクトシティへの取り組みは、

は、やむを得ず、51年生まれ、東大博士課程修了。専門は土木工学。



インドの繊維・衣料品産業は工業生産の14%、輸出の12%を占め、2007年度を占め、間接雇用も含めると就業者は8千万人に達する。あらゆる産業分野で同時成長を目指しているインド政府にとって、農業などと並ぶ最重要セクターだ。

インド経済最前線

綿糸、絹糸の生産は中国に次ぐ世界第2位。07年度の総売り上げ64.3億ドルのうち約35%を主に欧米向けのシャヤとタオル、ベッドカバーなどの輸出が占める。このため、世界同時不況に際しては50万人以上が失業する深刻な打撃を受けた。

底上げ急ぐ繊維 8千万人を雇用、合理化は道半ば 原材料や労働力に加え、デザインなどの人材に恵まれているのがインドの強み。これに替目として米国のウォルマート、スターバックス、GAP、スウェーデンのヘンネス・アンド・モリッツ(H&M)など、世界の大手小売りがインドで繊維を調達している。

本製工業用ミシドでシェアを拡大。その一方で、布地生産の70%の3分の2、動力のない手織機も資金水準トナムやパンダムが割高。国は決して万全とインド政府は備投資支援を